

ロンドンオリンピックにて入賞者がゼロであった マルチサポート事業のターゲット A 種目についての考察

Consideration of The “A Classed” Target Events Which There Were No Prize Winners at The 2012 London Olympic Game.

1K10C103-6 小川祥加
主査 間野義之 先生 副査 松岡宏高 先生

【目的】

本研究の目的は、充実した選手強化施策を施したにも関わらず、オリンピックにてパフォーマンスや成績として成果をあげることができなかった競技種目についてのマルチサポート事業を中心にした日本の国際競技力向上に関する取り組みを見直すことで、オリンピックに向けた競技力向上政策の課題を明らかにし、次回のオリンピックに向けてどのような対策が必要か、どのような取り組みをしていくべきなのかを提案することである。

【方法】

本研究は、各種目における過去の競技大会のデータや、中央競技団体、国際オリンピック委員会などが公表している競技力向上に関連する資料や文献などを収集し、それらを照らし合わせて、どのような施策がなされていたのか、選手自身がどう感じていたのかなどを明らかにし、それを基にして考察することにより行った。また、各競技関係者への半構造化インタビューを通し、より現場に近い意見を組み込んだ。

【結果】

文献調査、インタビュー調査を踏まえ、ロンドンオリンピックで成績が思わしくなかった主な原因について、セーリングの470級男女に関しては、情報の共有ができていなかった、ピーキングがうまくいかなかった、団結力、チーム力が欠けていた、器具・道具・艇への対応・準備が不十分だった、プロテスト力（抗議力）がなかった、全体的にコミュニケーションが足りていなかった、という6点が挙げられた。

また、ライフル射撃のピストル男子については、メンタル面で弱さが出た、試合中のリフレッシュが出来ていなかった、オリンピックという場の雰囲気にかけてしまった、という3点が挙げられた。

【考察】

セーリングの470級男女について、必要だと考えられることは以下であった。

ピーキングをしっかりとできるようにするために、可

能な限り最終代表選考会を早め、ピーキングのためのサポートを代表選手に特化して行うこと、ピーキング講習会を見直すこと、コンディショニング担当によるスケジューリングを見直すことが必要だと考えられる。器具・道具・艇への対応・準備については、事前の整備を念入りに行い、チューニングを徹底すること、マスト・セール・艇の研究開発において、新規のものが完成後に使用できるよう、研究開発側が素早く承認を下ろせるように体制を整えることが必要だと考えられる。プロテスト力をしっかりとつけるために、2004年以降行ってきたプロテスト力向上のための実践講習会の内容を見直し、語学対応能力を向上できるように徹底することが必要だと考えられる。団結力・チーム力が欠けていた点については、全体とのコミュニケーション不足、情報共有不足が関連しており、この2つを改善することにより、団結力・チーム力がつくと考えられる。

射撃のピストル男子について、必要だと考えられることは以下であった。

射撃は他のオリンピック競技と比べ、アスレチック的側面が少なく、他の競技と同じようにして競技サポートをしようとしても効果が表れにくいことが考えられる。そのため、今後、サポートをしていく際には今までよりさらに競技特性を考慮したサポートが求められる。また、選手個人が直前にオリンピック本番と同じ会場で競技し、優勝していること、世界ランクが1位だったこと、偶発的なアクシデントや大きな環境の変化が見受けられなかったことから、コンディショニングや身体トレーニングのサポート内容が効果的でなかったことや、他の物理的な問題がオリンピックでの成績不振につながったとは考えにくく、オリンピック独特の雰囲気や、オリンピック時の心理的問題が作用していたと考えられる。北京オリンピック終了後も、最後の最後での競り合いとなる最終弾までの5発のところでメンタルを含めた技術が不十分であることや、メンタル面の工夫や経験が足りない、という指摘が報告されており、オリンピックで好成績を残すことができるようにするために、メンタル面の徹底強化が必要となることが考えられる。